

## 達成動機と親和動機との関連に関する わが国の研究の展望

中山 勘次郎\*

(平成4年4月30日受理)

### 要 旨

本研究では、達成動機と親和動機との関連に関するわが国の研究が概観された。対象は1973年～1987年に発表された研究である。その結果、全体的に両動機間の相関はきわめて低かったが、特に小・中学校段階では、比較的高い正の相関が認められた。また、親和動機全体として達成動機と負の相関が報告されたのは1件だけであったが、積極的親和動機と消極的親和動機とを区別してみると、消極的親和動機は、達成動機とは負の相関を持つ傾向が認められた。

先行研究で指摘されてきた、達成動機と親和動機との対立的関係が支持されなかったのは、他者との親和的関係の維持を重視するわが国の社会的価値観に対応したものと考えられ、この見解を支持する主張がいくつか紹介された。一方、達成動機、親和動機概念自体の持つ曖昧さが、結果を複雑にしていることも考えられ、これらの概念をより明確にまた適切に再定義し、そのうえで両動機の関連性を再度検討する必要性が指摘された。

### KEY WORDS

achievement motive 達成動機

affiliation motive 親和動機

review 展望

correlational study 相関的研究

cultural difference 文化的差異

### 1. 達成動機研究における親和動機の位置づけ

達成動機研究において、古くから指摘されてきた事実には、達成動機の効果に関する性差の問題がある。全般的に、達成動機の効果は男性被験者において明確に認められ、一方女性被験者においては、曖昧な結果しか得られてこなかったのである。たとえば、達成動機の高さと他の行動変数との関連を検討した研究では、女子に関しては明確な関連性が確認されていない (Alper & Greenberger, 1967 ; French & Lesser, 1964 ; Lesser, Krawitz, & Packard, 1963 ; Vreoff, Feld, & Crockett, 1966)。また、教示により達成動機を喚起しようとした実験では、男子においてはリラックス条件や中性条件と比較して高い達成動機が喚起されたが、女子に関しては中性条件との間に差異が見られなかった (Alper & Greenberger, 1967)。こうした事実に対して McClelland, Atkinson, Clark, & Lowell (1953) は、女性においては達成動機より親和動機の方がより中核的なのではないかという説明を試みている。このような流れの中で、

\* 教育基礎講座

達成動機に対して親和動機がどのように関連しているかという問題が、少しずつ注目を集めるようになってきた。

達成動機とは別に、親和動機自体も、児童の達成行動に独自の影響を与えていることが指摘されている。たとえば French (1955) によれば、達成の重要性を強調した教示を与えた場合には、達成動機の高い者のパフォーマンスが高かったが、友好的な女性実験者が実験への協力を求めたりラックス条件では、親和動機の高い者のパフォーマンスが高かった。また一般には、達成動機が高く失敗不安の低い者は、適度に挑戦的な課題として中程度の困難度の課題を選択する傾向が指摘されているが、Atkinson & O'Connor (1966) では、親和動機の高い男性被験者は、女性実験者から観察されている条件で、中程度の困難度の課題を選択する傾向が強かった。さらに McKeachie (1961) では、親和動機の高い大学生は友好的な教師のクラスで成績が高く、友好的でない教師のクラスにおいては、親和動機以外の動機の高い学生の方が成績が高いことが見出されている。

しかし全体的に、達成場面において親和動機は、達成動機とは相いれない負の動機と見なされてきた。特に重要なことは、親和動機の中核をなしているのが、他者からの拒絶への不安 (fear of rejection) であると考えられていることである (Boyatzis, 1973; McAdams, 1982; Stewart & Chester, 1982)。Schachter (1959) の実験において、電気ショックをとまなう実験を予告された女性の被験者が、実験開始を待つ間、ひとりであるよりは他者、特に同一状況にある他の被験者といっしょに待つ方を多く選択したことは、不安と親和動機との関連性を強く示唆した。TAT 図版を用いた親和動機の測定においても、初期の測定法では、「人が他者から孤立していてそれを気にしていること、あるいは孤立する可能性に対して懸念を示していること」を親和イメージの条件としている (Shipley & Veroff, 1952; p. 351)。また質問紙による測定尺度でも、達成志向性と親和志向性を両極とした強制選択方式の尺度が開発されている (Lindgren, 1976; Sid & Lindgren, 1982)。

しかも、こうした測定法によって同定された親和動機は、実際他の否定的な属性との関連が高いことが明らかにされている。Shipley & Veroff (1952) の研究では、親和動機の高い被験者はソシオメトリック地位が低く、仲間から否定的なイメージを持たれていることが見出された。この傾向は、親和動機を「他者との正の情緒的関係を確立し、維持し、あるいは回復しようとする関心」と拡張的に再定義した Atkinson, Heyns, & Veroff (1954) でも変わらない。また、親和動機の高い者は社会的承認への欲求も高く (Crowne & Marlowe, 1964)、一方視スクリーンを通して観察されているという教示を与えると、高い不安を示す (Byrne, 1961) などの特徴も報告されている。そのほか、親和動機と達成動機の高さの組み合わせにもとづいて被験者を類型化した Schneider & Green (1977) は、達成動機が高く親和動機が低い群の方が、両動機とも高い群より学業成績が高く、学習行動に多くの時間を費やすことを見出している。

これらの報告はいずれも、達成動機や達成行動に対して、親和動機の高さが妨害的に作用していることを示している。自らの成功・達成を獲得するために、場合によっては他者との競争を含む達成動機は、他者との調和的關係を維持しようとする親和動機とは両立しにくいのではないかという見解を、これらの結果は支持しているといえよう。

## 2. わが国における達成動機と親和動機に関する研究の概観

以上に述べたように、全般に達成動機研究の中では、親和動機と達成動機とは独立か、あるいは対立するものとしてとらえられてきた。しかし、わが国においては、こうした図式は必ずしも当てはまらないように思われる。ここでは、この問題に関するわが国の研究を概観する。

達成動機や親和動機を実験的に喚起して、両動機の関連を検討した研究は、わが国にはほとんど見られない。このため本研究では、この問題に対して相関的なアプローチをとっている研究に焦点を当て、それらの概観が試みられた。

ここでは、1973～1987年の15年間に刊行された研究雑誌、研究紀要類および学会発表論文集から、可能なかぎり関連する研究を検索し、きちんとした統計値が記載されているものに限って収集した。しかしこうした報告は、それぞれの研究の中心課題というよりは、測定尺度の基礎的分析の一部として簡単に報告されているような場合が多く、関連する研究を網羅することはきわめて困難である。また入手できなかった資料も若干あり、本研究の分析も、この点において基本的な制約を受けていることを付言しておく必要がある。

さて、達成動機（親和動機も同様）の測定方法には、大きく2つの流れが区別される。ひとつは McClelland らが開発した TAT (Thematic Apperception Test) 図版を用いた方法をはじめとする投影法的な測定方法、もうひとつは、質問紙法による測定方法である。TAT は、達成動機研究の起源となった Murray (1938) による社会的欲求のリストに基づき、各欲求の強さを測定しようとする心理テストである。当初は主にこの TAT 方式による測定法が用いられていたが、尺度の信頼性が必ずしも確認されない、測定効率が悪い等の理由から、後に質問紙法による測定尺度が次々に開発されていった。しかし、これら2つの方法によって測定される達成動機は、必ずしも一致していない。2つの測定方法にもとづく達成動機得点の間には、一貫した相関が認められていないのである。Atkinson (1958) も、TAT 法によって測定されるのは一般的な行動傾向であって、質問紙法によって測定されるような具体的場面での行動傾向とは異なるものであると指摘している。そこでここでは、2つの測定方法を用いた研究を区別してまとめてみる。

### 2.1. 投影法的測定にもとづいた達成動機と親和動機

まず表1には、McClellandらと同様な TAT 図版による測定法を用いた研究がまとめてある。これに該当する研究には、宮本・加藤 (1975) と前原・倉智・東江・井上 (1981) の2つがあるが、このほか宮本・加藤 (1975) は、関・三隅 (1969) の報告したデータをもとに再分析した数値を報告しており、これもあわせて検討したい。

宮本・加藤 (1975) は、Atkinson (Atkinson & Feather, 1966) が大学生35名を対象として、達成動機・親和動機得点間に  $r = -.06$  の順位相関係数<sup>1)</sup>を報告したことから出発し、わが国における達成と親和との関係はこれとは異なるのではないかと予測した。そこでまず、達成動機と親和動機の高低的組み合わせによって被験者(中学生170名)の群分けを行った関・三隅(1969)のデータを再分析し、両動機の間には正の関連を見出した ( $\chi^2 = 6.006$ ,  $df = 1$ ,  $p < .05$ ;  $\phi$  係数を計算してみると .188 になる)。次に宮本らは、中学1年生99名に対して実際に TAT 図版による測定を行い、男女とも正の相関を報告している。

表1 投影法によって測定された達成動機と親和動機との相関に関する研究

出典	被験者 学年	被験者 人数	相関係数		備考
			男子	女子	
宮本・加藤 (1975)	中1	99名	.3858 (.3688)	.3201 (.3065)	順位相関
前原・倉智・東江・ 井上 (1981)	小5 中2	319名 293名	.187	.214	全体 大阪・小5
			.184	.165	中2
			.367	-.052	沖縄・小5
			.123	.085	中2

また前原他 (1981) は、大阪・沖縄、小学生・中学生を含む大規模なサンプルに対して測定を実施している。それによれば、両動機間の相関係数はサンプルごとに  $r = -.052 \sim .367$  (全体では  $r = .187$ ) の値であり、沖縄サンプルの小学5年生女子で負方向の低い相関が見られた以外は、全般に正の相関が得られている。

## 2.2. 質問紙法的測定にもとづいた達成動機と親和動機

一方、質問紙法を用いた研究は比較的多く、9件の研究を収集することができた。これらの研究では、用いられたサンプルの規模も全般に大きい(表2)。また、どの研究も Likert タイプの評定尺度(一部は「はい・いいえ」の2件法あるいは「どちらでもない」を加えた3件法)を用いた自己報告式の質問紙によっている。

まず下山・曾我部・岡本 (1976; 下山・曾我部, 1977も同一データを報告している) では、達成動機と親和動機との間にはきわめて低い相関しか認められていない。また彼らは、親和動機尺度の因子分析から4因子を抽出し、そのうち因子Iは交友関係を維持・拡大しようとする積極的傾向の因子、因子IIIは交友関係の喪失を恐れる消極的傾向の因子に対応するとしている。これらの因子と達成動機との相関を見てみると、低い相関ではあるが、消極的親和動機に関しては男女とも負方向の相関であるのに対して、積極的親和動機に関しては正方向の相関が見られている。また下山 (1981) は、この尺度を別の小学6年生に対して実施しているが、ここでも両動機間の相関はほとんど認められない。

TATとともに Murray (1938) の欲求リストに基づいた心理テストに、EPPS (Edwards Personal Preference Schedule; Edwards, 1954) がある。TATが投影法であるのに対して、EPPSは一対比較法を用いた自己報告式の質問紙である。土井 (1978) は、このEPPSの各項目を3件法の評定尺度に直して男子大学生に実施し、15の下位尺度得点をもとにした因子分析から4因子を抽出した。このうち、因子IIが一般的な達成要求、因子IIIが一般的な親和要求と命名されているが、両因子の因子間相関係数は、 $r = .422$  と高い相関であった。さらに土井 (1982) は、この4因子に価値観の6次元尺度を加えた因子分析を報告しているが、ここでも達成要求・親和要求間に比較的高い正の相関が見出されている。

前原 (1980) は、26項目の質問紙を作成して大学生の達成傾向・親和傾向を測定したが、両者の間には相関は見られなかった(女子の相関の方向は負方向)。さらに前原 (1983) は同一尺

表2 質問紙法によって測定された達成動機と親和動機との相関に関する研究

出典	被験者		相関係数		備考
	学年	人数	男子	女子	
下山・曾我部・岡本 (1976)	小6	108名	.15	.06	達成動機×親和動機
			.18	.07	達成動機×積極的親和動機
			-.12	-.03	達成動機×消極的親和動機
土井 (1978)	大学 (男子のみ)	217名	.422	—	因子間相関
土井 (1982)	大学 (男子のみ)	217名	.314	—	価値観尺度を含んだ 因子間相関
前原 (1980)	大学	291名	.016	-.057	
山内 (1980)	大学	399名	-.15		親和不安×手段的活動性
			.09		親和不安×成功への願望
			.11		親和不安×緊張低減
			-.35		親和不安×過度な自信
前原・倉智・東江・ 井上 (1981)	小5	319名	.264		全体
	中2	293名	.136	.201	大阪・小5
			.499	.311	中2
			.275	.217	沖縄・小5
			.196	.245	中2
下山 (1981)	小6	262名	.08	.05	
前原 (1983)	大学	278名	-.133	-.279	
			(-.108	-.255)	順位相関
宮本・落合・加藤 (1985)			.09	-.09	全体
	小学	95名	.10	.32	小学生
	中学	112名	.25	-.37	中学生
	高校	72名	.10	-.09	高校生
	大学	134名	.00	-.01	大学生

度を別の大学生サンプルに実施し、今度は男女とも負の相関を得ている。この場合も、女子の相関の方が高かった。

TAT法による研究の中で述べた前原他(1981)は、同時に質問紙法による測定も試みており、 $r=.136\sim.499$ の比較的高い正の相関を得ている。またこの研究では、TAT法による達成・親和動機得点と、質問紙法による得点との相関係数も報告されている。それによれば、両測定法間の相関は達成動機に関して $r=-.041\sim.179$ 、親和動機に関して $r=-.211\sim.114$ と、どのサンプルでも、またどちらの動機に関してもほとんど相関は見られていない。特に、サンプルによっては負の相関係数さえ得られていることは、注目に値しよう。

山内(1980)は、成功達成動機・失敗不安動機・成功不安動機より成る達成関連動機尺度を

大学生に対して実施し、最適尺度法によって8つの下位尺度にまとめ直している。この中で初期の親和動機概念と最も近いのが〈親和不安〉尺度であるが、この尺度と、達成動機に関連する4つの尺度との相関を見ると、特に〈過度な自信と高慢さ〉尺度と $r = -.35$ 、〈達成への手段的活動性〉と $r = -.15$ の負の相関が見出されている。

宮本・落合・加藤（1985）は小学生から大学生にわたる広い範囲の対象者に対して達成・親和動機の測定尺度を実施している。それによれば、小学生女子では $r = +.32$ 、中学生女子では $r = -.37$ と反対方向の相関の傾向が示されたが、他の学年段階では相関が見られないなど、一貫した相関の傾向は得られていない。また男子ではどの学年段階でも正方向の相関ではあるが、相関は全般に低かった。

### 2.3. 概観のまとめ

さて、これらの報告をまとめ、達成動機と親和動機との全体的な相関の傾向を見てみよう。各研究が報告している全般的な相関係数の平均をとると<sup>2)</sup>、男子は $r = .178$ 、女子は $r = .100$ と、両動機間の相関はきわめて低いものであったが、その方向は正の相関であった。また、報告されている相関係数を被験者の年齢段階ごとに整理し、小学生・中学生・高校生・大学生のそれぞれの平均値を求めると、高校・大学生では相関はほとんど見られないが（高校生 $r = .005$ 、大学生 $r = -.075$ ）、小・中学生ではいくらか高い相関係数が得られている（小学生 $r = .160$ 、中学生 $r = .236$ ）。いずれにしても、両動機間に実質的な負の相関は認められていない。

さらに宮本他（1985）では、達成動機・親和動機のほか、達成行動・親和行动についての自己概念、すなわちそれぞれの動機に関連する行動を実際にどの程度行っているかの自己認知を測定し、そのレベルでの達成・親和領域間の関連性についても検討を加えている。それによれば、男子 $r = .50$ 、女子 $r = .55$ と高い正の相関が得られた。これに対して、前原（1983）は唯一負の相関を報告しているが、同一尺度を用いた前原（1980）の結果はこれとは異なっており、また前原の報告した項目一得点相関係数や因子分析の結果を見ると、各尺度の内的整合性は必ずしも満足できるものではないように思われる。

ところで、これらの研究を詳しく見ると、もっと複雑な関係も指摘される。たとえば、先に述べたように下山他（1976）は、親和動機に関してBoyatzis（1973）の述べる積極的な親和動機と消極的な親和動機の2種類を区別した。それによれば、いずれも低い値ではあるが、積極的親和動機は達成動機と正方向の、消極的親和動機は負方向の相関が見出された。山内（1980）も同様である。この研究での親和不安尺度は、Boyatzisの消極的親和動機に対応すると考えられるが、この動機は成功達成への自信やそのための活動性に対して負の関連を示したのである。

以上の展望をまとめると、特に親和動機を消極的なものとしてとらえた場合には負の相関が報告されているが、それ以外では、投影法による測定でも質問紙による測定でも、両動機間の相関はほとんど見られないか、または正の相関が報告されていると言えよう。また、高校・大学生では両動機はほぼ独立であるのに対し、小・中学生では正の相関が報告されている。すなわち、わが国においては達成動機と親和動機はけっして対立するものではなく、特に小・中学生の段階ではむしろ積極的に関連し合っていると考えられるのである。

### 3. わが国の文化における達成観の特徴

こうした達成動機と親和動機との関連は、わが国の文化的価値観の特徴から説明することができるかも知れない。すなわち、アメリカが競争と自己主張を重視した自律的達成を志向する社会であるのに対して、わが国の達成観は、他者との親和的対人関係を維持しつつ個人的達成を遂げることを志向しているのではないだろうか。

この点については、我妻(1985)が端的に記述している。彼は、「日本では血でつながる家族を集団の原型と考え、他のすべての社会的関係を家族に擬して維持しようとする」(p. 53)と述べ、さらに「思いやりといたわりと、それに対する感謝、これが日本の人間関係の基底である」(p. 54)として、わが国における社会的関係の緊密さを指摘する。一方アメリカ社会については、次のように記述している。

“早くから自立自足を強いられるアメリカ人が、独りで生きてゆく社会は、熾烈な競争の修羅場である。年功序列制とはおよそらはらな信賞必罰を原則とする社会で、人びとは競い合い、他人を退け、成功成就へと猛烈な努力を続けなければならない。(p. 50)”

孤独に耐え、自立し、勤勉に努力をつづけ、競争に勝ち抜き、社会的成功をなしとげるのがアメリカ人の理想なのであり、そうした個人主義社会では、一人ひとりの人間がバラバラであり、究極において自分だけで立っている、と我妻は指摘する。

同様に指摘は古くからなされてきている。たとえば中根(1967)は、「つねに、自己との現実的な、そして人間的なつながりに、日本人の価値観が強くおかれているといえよう。…(中略)…すなわち、対人関係が自己を位置づける尺度となり、自己の思考を導くのである。」(p. 170)と評し、わが国では人と人との関係を何よりも優先することを指摘している。

Clark(1977)も、わが国の集団主義について詳細な考察を加え、欧米人は個人としての完結した存在であるというイメージを保つべく気を使っているのに対し、日本では、個人としての完結性は集団に帰属することによってはじめて確立するとして、そのユニークさを強調する。さらに波多野・稲垣(1981)も、アメリカが達成社会であるのに対して日本は親和社会であるとして、両国での価値観の相違に言及し、それぞれの文化における達成感情の違いについて考察を加えている。

さらに最近の指摘では、今井(1990)が、日米の小学校国語教科書に表れたテーマを分析し、両社会での強調点の違いを整理している。それによれば、アメリカでは、自我の確立・自己の客観的認識・自己主張・自立心/独立心・自己責任・強い意志・創意工夫・興味関心・チャレンジ精神・個性の尊重・長所の発見などによって特徴づけられる「創造性と個性にあふれた強い個人」のテーマが多く、一方日本で重視されているのは、親子関係を中心とした暖かい人間関係と、やさしさや思いやり、自己犠牲などである。同じ人間関係の扱い方でも、情緒的帰属感を強調するわが国とは異なり、アメリカの教科書に描かれているのは、家族であっても別個の個人である、友人になるのにも努力が必要といった、「緊張感のある人間関係」である、と彼は指摘する。

これらの主張は、主にアメリカ社会において主張されてきた、達成動機と親和動機とを対立的にとらえようとする見方が、わが国には必ずしもそのまま適用できないことを示唆するものと言えよう。ここまで述べてきたような価値観を基底とするわが国においては、親和動機は達成動機とより積極的にかかわっていると言えるのではないだろうか。

先に述べた土井(1982)は、EPPSをもとにした要求の4次元尺度と価値観尺度との正準相関分析を行い、両者の関連性を検討している。その結果、第1次元では達成・親和要求と共同的・道徳的・努力的人生観がまとまり、第3次元では達成要求が+、親和要求が-、努力の・道徳的人生観が+、共同的人生観が-方向に寄与していることを見出し、わが国における達成動機には、親和的達成動機と非親和的達成動機の2種類があると主張している。土井(1985)の因子分析でもこの傾向は確認され、因子寄与の比較から、日本では親和的達成動機の方が主要であると結論づけている。これらは男子大学生を対象とした研究であったが、さらに土井(1988)は、女子大学生や専門学校生においても親和的・非親和的達成動機の存在を確認している。

#### 4. 達成動機・親和動機概念の問題点

ところで、達成動機と親和動機との正の相関を、ここまではわが国の特徴として述べてきたが、諸外国の研究において、両動機の間には負の相関が一貫して確認されているというわけではない。たとえば、TAT法を用いた研究を展望したBowen(1973)でも、ほとんど有意な相関は見られておらず、宮本・加藤(1975)に報告されているAtkinsonの $r = -.06$ という負の相関係数も、実質的に有意な相関ではない。研究結果は、必ずしも一貫してはいないのである。これには、達成動機や親和動機概念自体が多義的であることも、影響を与えているのではないだろうか。

第一にこの問題は、ある個人が他者との関係を強調するかどうかという単純な問題ではなく、達成動機も、他者との関係性を志向する動機と考えられるという問題があげられる。すなわち、より高い達成水準に到達したいという欲求の中には、他者からの賞賛を得たい、認められたい、他者より抜きん出たいといった社会的な成分が含まれているのである。

達成動機の定義を見てみると、Crandall, Katkovsky & Preston(1960)は、達成行動とは、遂行能力に関して「是認を獲得し、あるいは否認を回避するよう方向づけられた行動である」(p. 789)と定義した。また、Atkinson(1964)の定義では、達成動機の理論は「ある卓越基準によって(自分自身あるいは他者から)評価されること、および、行為の結果が好意的に評価されるか非好意的に評価されるかのいずれかであることがわかっている場合に適用される」(p. 240f)とされている。これらの定義に共通するのは、是認・否認などといった他者からの評価に言及している点である。すなわち、達成動機には他者からの評価を求めるといった社会的な動機が含まれており、しかもそれは、課題そのものへの動機づけと同様に、その課題に対する成功感・能力感を高めるために積極的な役割を果たしていることが推測される。この点において達成動機は、純粋にその達成課題への興味・関心にもとづく学習動機として定義される内発的動機づけとは大きく異なる概念なのである。

Murray(1938)の欲求リストでも、達成動機は親和動機とともに社会的動機の一つとして掲げられている。一方、探索欲求や好奇心などの内発的動機づけは、これらとはまったく別個に扱われている(Murray, 1964)。Madsen(1974)でも、好奇心や不協和を低減しようとする動機は認知的な動機であり、皮質的動機(cortical motive)として分類されているのに対して、達成動機は他の社会的動機、情緒的動機とともに辺縁系の動機(limbic motive)に分類されている。



以上のように、達成動機自体が社会的意味あいの強い動機なのであり、他者からの賞賛や評価と密接にかかわっていることが推測される。見方をかえれば、社会的動機のうち積極的な成分を、達成動機概念が取り込んでいるのである。こうした概念の曖昧さが、達成動機と親和動機との関係をより複雑なものにしているのではないだろうか。

一方、初期においては、全般的に否定的なニュアンスでしかとらえられてこなかった親和動機は (Shipley & Veroff, 1952), その後より積極的なものとして概念が拡張されてきたが、さらにいくつかの研究では、概念の明確化を求めて、親和動機の消極的な成分と積極的な成分とを分離しようと試みてきた (Boyatzis, 1973; deCharms, 1957)。しかし、積極的な成分の方が親和行動をよく予測するという指摘 (Fishman, 1966) がある一方で、ソシオメトリックテストにおいて仲間から拒否されているというフィードバックを与えた後、消極的親和動機ではなく積極的親和動機が高められたとの報告がある (Rosenfeld & Franklin, 1966) など、その妥当性・有効性は必ずしも確認されていない。

また別の研究者たちは、積極的な成分と消極的な成分とを分離するため、親和動機以外の動機概念化を試みている。Horner (1968) は成功可能性が高まるほど不安が強くなるという成功回避動機 (motive to avoid success) を提唱したが、この動機は、成功と社会的拒絶への不安との葛藤によって生じるとされ、達成動機とは負の関連性を持つ社会的動機づけである。一方 McAdams (1980) は、親和動機の積極的成分を中心とした親密動機 (intimacy motive) を提唱している。親密動機は、緊密で温かく相互交渉的な関係への志向性として定義される。この動機は、拒絶への不安を内包しない点で親和動機と異なっており、また勢力動機が他者に対して影響的・統制的なのに対して、受動的で統制しない関係を志向している点で、勢力動機とも異なっている。

その後の研究では、親密動機の高い者は温かい、情愛のある、誠実な、自然な、支配的でない、自己中心的でないなど親和的な属性において友人から肯定的に評定され、一方親和動機とこれらの属性との相関はほとんど見られないこと、物語の中の対人的情報をよく記憶していること、心理劇や実際の交友関係において親密な行動や認知が多く見られ、特に非統制的・受動的な相互作用スタイルを示したことなどが見出されている (McAdams, 1980; McAdams & Constantian, 1983; McAdams & Powers, 1981; McAdams, Healy, & Krause, 1984)。

これらの研究は全体として、他者からの拒絶への不安を内包し、否定的なイメージでとらえられがちであった親和動機を、より積極的な動機としてとらえ直そうとする試みであり、一定の成果を上げてもいる。しかし、達成動機と親和動機とのかわりという観点だけで言えば、この試みも、先に述べたように達成動機が積極的な社会的動機の成分を分離できない以上、限界があろう。

## 5. 全体的考察

本研究では、達成動機と親和動機との関連に関するわが国の研究の概観が試みられた。その結果、全体的に両動機間の相関はきわめて低かったが、特に小・中学校段階では、比較的高い正の相関が認められた。また、親和動機全体として達成動機と負の相関が報告されたケースは1件だけであったが、他者との交友関係を積極的に拡大・維持しようとする積極的親和動機と、

他者からの拒否や孤立への不安を中核とする消極的動機とを区別してみると、消極的親和動機は、達成動機とは負の相関を持つ傾向が認められた。

達成動機の実研究者たちによって指摘されてきた、達成動機と親和動機との対立的関係が支持されなかったことについては、他者との親和的關係の維持を重視するわが国の社会的価値観に対応したものと推測される。しかし、その一方で達成動機・親和動機概念自体の持つ曖昧さが、結果を複雑にしていることも考えられる。したがって、これらの関連性をより明確にするためには、まず達成動機概念の持つ「社会的側面」を、もうひとつの側面、すなわち内発的動機づけと同様に学習課題へと直接に向かう認知的な動機の成分と厳密に区別して考える必要がある。一方で、親和動機に関しては、その消極的成分と積極的成分を区別する必要があり、特にその積極的成分の適切な概念化が望まれる。

また親和動機に関しては、その高さや行動への効果に関して性差が見られている場合が多く、先に検討した研究でも、宮本・加藤(1975)、前原他(1981)、下山他(1976)、前原(1980, 1983)、下山(1981)の各研究が、女子の親和動機の方が有意に高いことを報告している。このような性別による傾向の違いもまた、両動機間の関係を複雑にしている一要因と言えよう。初期の実研究者たちが指摘してきたように、親和動機が女性に優位に作用する動機であるなら、性別の要因を明確に組み込んだ検討が必要である。しかし一方では、性差を仮定しない親和動機概念、たとえばMcAdams(1980)の親密動機の方が、親和的行動や認知に対する予測的妥当性が高いとする研究成果も得られており、こうした性差の問題から離れた親和動機概念を新たに定義し、従来の親和動機概念と比較検討することも、積極的に試みる価値がある。

現実の児童・生徒の学習・達成場面を考えると、彼らを取りまく社会的文脈がさまざまに影響を与えていると考えられ、児童の社会的動機も、いろいろな面で児童の達成行動を規定していると考えられる。こうした影響性を広範に検討するためには、以上のような概念の再構築を経て、達成動機と親和動機との関係について、さらに詳細な分析を進めていく必要がある。

## 注

- 1) 宮本・加藤は、この相関係数を「きわめて低い負の相関」として扱っているが、これは対象者数から言っても、相関が見られなかったものとして扱うほうが妥当であろう。
- 2) Fisherの $z$ 変換によって正規化した平均値であり、計算にはBarker(1990)によるBASICプログラムが用いられた。ただし、土井(1978, 1982)および因子ごとの相関しか報告のない山内(1980)は除いてある。また前原他(1981)には男女こみの相関係数が報告されていないため、各サンプルごとの相関係数を用いて計算している。

## 引用文献

- Alper, T. G., & Greenberger, E. 1967 Relationship of picture structure to achievement motivation in college women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 7, 362-371.
- Atkinson, J. W. (Ed.) 1958 *Motives in fantasy, action, and society*. Princeton, NJ: Van

- Nostrand.
- Atkinson, J. W. 1964 *An introduction to motivation*. Princeton, NJ : Van Nostrand.
- Atkinson, J. W., & Feather, N. T. (Eds.) 1966 *A theory of achievement motivation*. New York : Wiley.
- Atkinson, J. W., Heyns, R. W., & Veroff, J. 1954 The effect of experimental arousal of the affiliation motive on thematic apperception. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **49**, 405-410.
- Atkinson, J. W., & O'Connor, P. 1966 Neglected factors in studies of achievement-oriented performance : Social approval as an incentive and performance decrement. In J. W. Atkinson & N. T. Feather (Eds.) *A theory of achievement motivation*. New York : Wiley.
- Barker, D. G. 1990 Averaging correlation coefficients : A BASIC program. *Educational and Psychological Measurement*, **50**, 843-844.
- Bowen, D. D. 1973 Reported patterns in TAT measures of needs for achievement, affiliation, and power. *Journal of Personality Assessment*, **37**, 424-430.
- Boyatzis, R. E. 1973 Affiliation motivation. In D. C. McClelland & R. S. Steele (Eds.) *Human motivation : A book of readings*. Morristown, NJ : General Learning Press.
- Byrne, D. 1961 Anxiety and the experimental arousal of affiliation need. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **63**, 660-662.
- Clark, G. 村松増美 (訳) 1977 日本人 —ユニークさの源泉—(新版) サイマル出版会
- Crandall, V. J., Katkovsky, W., & Preston, A. 1960 A conceptual formulation for some research on children's achievement development. *Child Development*, **31**, 787-797.
- Crowne, D. P., & Marlowe, D. 1964 *The approval motive*. New York : Wiley.
- deCharms, R. 1957 Affiliation motivation and productivity in small groups. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **55**, 222-226.
- 土井聖陽 1978 要求の四次元 人間科学 (関西大学大学院), No. 11, 57-71.
- 土井聖陽 1982 達成動機の二次元説 —親和的達成動機と非親和的達成動機— 心理学研究, **52**, 344-355.
- 土井聖陽 1985 達成動機の二次元と性格 心理学研究, **56**, 107-110.
- 土井聖陽 1988 女子学生における親和的達成動機と非親和的達成動機 心理学研究, **58**, 397-400.
- Edwards, A. L. 1954 *Edwards personal preference schedule*. Psychological Corporation.
- Fishman, D. B. 1966 Need and expectancy as determinants of affiliative behavior in small groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 155-164.
- French, E. G. 1955 Some characteristics of achievement motivation. *Journal of Experimental Psychology*, **50**, 232-236.
- French, E. G., & Lesser, G. S. 1964 Some characteristics of the achievement motive in women. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **68**, 119-128.
- 波多野誼余夫・稲垣佳世子 1981 無気力の心理学 —やりがいの条件— 中央公論社
- Horner, M. S. 1968 Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situations. *Unpublished doctoral dissertation*, University of Michigan.

- 今井康夫 1990 アメリカ人と日本人 —教科書が語る「強い個人」と「やさしい一員」— 創流出版
- Lesser, G. S., Krawitz, R. N., & Packard, R. 1963 Experimental arousal of achievement motivation in adolescent girls. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **66**, 59-66.
- Lindgren, H. C. 1976 Measuring need to achieve by NachNaff scale: A forced-choice questionnaire. *Psychological Reports*, **39**, 907-910.
- Madsen, K. B. 1974 *Modern theories of motivation*. Copenhagen: Munksgaard.
- 前原武子 1980 達成傾向と親和傾向 琉球大学教育学部紀要 (第二部), **24**, 233-242.
- 前原武子 1983 達成傾向と親和傾向 —性差の分析的研究— 琉球大学教育学部紀要 (第二部), **26**, 283-293.
- 前原武子・倉智佐一・東江康治・井上 厚 1981 達成動機および親和動機の発達に関する研究 (II) —地域差, 性差, 発達差, および両尺度の関係について— 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 632-633.
- McAdams, D. P. 1980 A thematic coding system for the intimacy motive. *Journal of Research in Personality*, **14**, 413-432.
- McAdams, D. P. 1982 Intimacy motivation. In A. J. Stewart (Ed.) *Motivation and society*. San Francisco: Jossey-Bass.
- McAdams, D. P., & Constantian, C. A. 1983 Intimacy and affiliation motives in daily living: An experience sampling analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 851-861.
- McAdams, D. P., Healy, S., & Krause, S. 1984 Social motives and patterns of friendship. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 828-838.
- McAdams, D. P., & Powers, J. 1981 Themes of intimacy in behavior and thought. *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 573-587.
- McClelland, D. C., Atkinson, J. W., Clark, R. A., & Lowell, E. L. 1953 *The achievement motive*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- McKeachie, W. J. 1961 Motivation, teaching methods, and college learning. In R. M. Jones (Ed.) *Nebraska Symposium on Motivation: 1961*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- 宮本美沙子・加藤千佐子 1975 達成動機と親和動機との関係について 日本女子大学紀要 (家政学部), **22**, 23-28.
- 宮本美沙子・落合孝子・加藤千佐子 1985 達成動機と親和動機の関係について 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 444-445.
- Murray, E. J. 1964 *Motivation and emotion*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Murray, H. A. 1938 *Explorations in personality*. New York: Oxford University Press.
- 中根千枝 1967 タテ社会の人間関係 —単一社会の理論— 講談社
- Rosenfeld, H. M., & Franklin, S. S. 1966 Arousal of need for affiliation in women. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 245-248.
- Schachter, S. 1959 *The psychology of affiliation*. Stanford, Calif.: Stanford University Press.
- Schneider, F. W., & Green, J. E. 1977 Need for affiliation and sex as moderators of the relationship between need for achievement and academic performance. *Journal of*

- School Psychology*, **15**, 269-277.
- 関 文恭・三隅二不二 1969 PM 式リーダーシップ効果の動機論的考察 一達成動機・親和動機を中心の一 日本心理学会第33回大会発表論文集, 426.
- 下山 剛 1981 達成動機づけの教育心理学 金子書房
- 下山 剛・曾我部和広 1977 児童の達成・親和動機づけの測定に関する研究 東京学芸大学紀要 (第1部門), **28**, 38-46.
- 下山 剛・曾我部和広・岡本敏雄 1976 達成・親和動機づけの測定に関する研究 日本教育心理学会第18回総会発表論文集, 610-613.
- Shipley, T. E. Jr., & Veroff, J. 1952 A projective measure of need for affiliation. *Journal of Experimental Psychology*, **43**, 349-356.
- Sid, A. K. W., & Lindgren, H. C. 1982 Achievement and affiliation motivation and their correlates. *Educational and Psychological Measurement*. **42**, 1213-1218.
- Stewart, A. J., & Chester, N. L. 1982 Sex differences in human social motives: Achievement, affiliation, and power. In A. J. Stewart (Ed.) *Motivation and society*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Veroff, J., Feld, S. C., & Crockett, H. J. 1966 Explorations into the effects of pictures cues on thematic apperceptive expression of achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 171-181.
- 我妻 洋 1985 家族の崩壊 文芸春秋
- 山内弘継 1980 達成関連動機の測定尺度の分析 教育心理学研究, **28**, 275-283.

## A Review on the Relation between Achievement Motive and Affiliation Motive in Japan

Kanjiro NAKAYAMA\*

### ABSTRACT

In the present study, ten Japanese researches on the relation between achievement motive and affiliation motive were reviewed. In general, they reported few correlations between these two motives. Positive correlations were found especially with elementary- and secondary-school children. Affiliation motive as a whole did not correlate negatively to achievement motive, but when distinguished between "positive" and "negative" aspects, negative affiliation motive was found to have negative correlation.

The review did not support incompatibility between the two motives. Rather, they suggested some positive relation between them. This can be explained by a value in Japanese culture, which emphasizes the maintenance of harmonious and affiliative relationship to others. Some conceptual refinement of affiliation and achievement motive will be needed to clarify the influence of this cultural difference to the relation between these two motives.

---

\* Division of Foundations